

Otto von Bismarck : Leben und Einfluss  
ビスマルクの生涯とヨーロッパに与えた影響

9 9 k 1 0 1 4

Takashi Okada

# 目次

はじめに.....	1
1 ビスマルク誕生前後のドイツの状況.....	1
2 生い立ちから結婚まで.....	3
3 ビスマルクの政治.....	10
4 Otto von Bismarck (独語) .....	32
参考文献.....	34

## はじめに

一般的なドイツ人についてのイメージは、粗野でお人好みな田舎者、音楽や哲学、詩を愛する夢や空想の世界の人間というものから第2次世界大戦を経た後では、Otto von Bismarck（オットー・フォン・ビスマルク）に代表される厳格な官僚や血の匂いがする軍人のイメージが強くなってしまった。このようなビスマルク像について、ドイツ帝国が成立するまでの過程を中心に、当時のドイツ国内外の様子も踏まえながら検証してみることにする。

### 1 ビスマルク誕生前後のドイツの状況

1871年までドイツ統一国家はなかったが、ドイツという地名はあり、ドイツ文化というべきものはあった。確かに1806年まで神聖ローマ帝国という別称をもつドイツ帝国が存在したが、この帝国は300有余の絶対主義的な領邦国家群に分かれていた。しかもドイツ皇帝の地位にオーストリア帝国のHabsburg（ハプスブルク）家が就いていたとはいえ、ハプスブルク家の勢威が行き届いたのはオーストリア帝国領に留まっていた。その他の300余りの領邦国家群は、それぞれ独立主権国家として、独自に官僚や軍隊を持ち、統治を行い、諸外国との外交関係をも結んでいた。ハプスブルク家はドイツ帝国の帝冠

を戴いていたとはいえ、それは言わば「虚飾の帝冠」に過ぎなかった。

1806年に神聖ローマ帝国が、Napoleon . (ナポレオン) 軍に敗れ、解体された後、300余り領邦国家群はナポレオンに都合良いように整理・統合された。そして形式的にも存続していたドイツの中心、つまりハプスブルク家のドイツ皇帝の地位は消滅し、文字通りドイツは地名だけになってしまった。そしてナポレオンは、300余りの領邦国家群を整理・統合して約40の独立主権国家を創り出した。このような状態から抜け出すのは、ナポレオンが失脚し、Wien (ウィーン) 会議<sup>1</sup>でヨーロッパの国境線が新たに確定されてからのことである。この結果、1815年ドイツ連邦が生まれた。

だが、このドイツ連邦も統一国家と言うにはほど遠いものであった。連邦には35君主国と4自由市が加盟していたが、それぞれが独立した主権を持つ諸邦国の緩い連合体に過ぎなかった。諸邦国は独自の政府・裁判機構、軍隊を持ち、外国と条約を結ぶ権限さえも備えていたのである。そして連邦には中央政府も元首もなかった。ただ Frankfurt (フランクフルト) に各邦国代表の集まりである連邦議会があり、オーストリアを議長国としていたが、これが唯一の中

---

<sup>1</sup>オーストリア宰相 Metternich (メッテルニヒ) が主催し、ナポレオン以後のヨーロッパ秩序について討議した。そして彼はヨーロッパをフランス革命以前の状態に戻そうと、復古を基調とする正統主義を主張した。この保守・反動的なウィーン体制に抗して、諸国に自由主義運動が燃え盛った。

央機関であった。このような状態が、後に述べるように1867年に、北ドイツ連邦(71年に創設されるドイツ帝国の母体)が発足するまで続くのである。

しかしながら19世紀に入り、ヨーロッパが経済的にも政治的にも、列強による厳しい競争と進出の舞台となるにつれて、ドイツの国家的分裂の克服は、ドイツの商工業の発展の為に、またその発展を支える政治的統一の為に、達成されねばならない国民的課題となってきた。

## 2 生い立ちから結婚まで

**両親** ビスマルクは、1815年の4月1日に、Magdeburg(マゲデブルク)近郊のElbe(エルベ)川に近いSchönhausen(シェーンハウゼン)で農場主Ferdinand von Bismarck(フェルディナント・フォン・ビスマルク)と妻Wilhelmine Louise Mencken(ヴィルヘルミーネ・ルイーゼ・メンケン)の間の第4子として生まれた。彼の家系は貴族・Junker(ユンカー)<sup>2</sup>であり、祖先達は貴族的誇りに生きていた。彼の父も青年時代には将校として過ごし、その後はPommern(ポメルン)の農場を管理し経営していた。彼の幾世代もの先祖達は、仲間の貴族・

---

<sup>2</sup>ドイツのエルベ川以東に存在した大地主貴族。18C以降、プロイセンの高級官僚を独占した。

ユンカーと同じように、折々農場・山野を見廻る以外は、森と湖に被われた中で狩猟を楽しみ、春は釣り、夏は泳ぎ、あまり読書もせず、剛健な体力を欲しいままに、大いに飲み、大いに食した。そして彼らは都会を嫌い、Bourgeoisie（ブルジョアジー）<sup>3</sup>を成り上がり者として蔑み、貴族・ユンカー仲間の狭い付き合いを日常とした。ビスマルクはこうした家系と伝統的慣習を胸一杯に吸い込むことによって、強固な保守主義と反革命主義を身に付けていった。

一方、母の方は学者と高級官吏の家柄であった。母の父はFriedrich(フリードリヒ)大王の内閣秘書官であった為、彼女はメンケン家の文化的な雰囲気の中で育ち、その頃の王子達<sup>4</sup>は幼なじみだった。ビスマルクの母は、こうした家庭に育ったので、知的で都会好みで社交好きであった。そして強い野心と功名心を持ち、勤勉で品行も方正であった。だから彼女は、ビスマルク家の伝統的家風に馴染まず、子供達に対しても地方の田舎ユンカーのまま終わらせることを嫌い、外交官として中央政府に進出することを強く期待したのだった。

ビスマルクの精神形成期には、父方と母方との対照的な雰囲気が、言わば二

---

<sup>3</sup> 資本家階級の人。貴族と農民の間に存在した富裕な商人などの市民を指す。

<sup>4</sup> 後のフリードリヒ・ヴィルヘルム4世や、その弟で後のプロイセン王・ドイツ皇帝のヴィルヘルム1世。

つの魂のように沈殿していった。だが少年期のビスマルクは、父と田舎を愛し、Berlin（ベルリン）と母を憎んだ。この愛憎の関係が、彼を頑固な保守主義者にし、ブルジョア自由主義への嫌悪感を育てていった。

**初等教育、中等教育** 母は1822年、6歳のビスマルクをベルリンのPlamann（プラーマン）教育施設に送った。この学校はPreußen（プロイセン）の精神と結びついており、強制と規律、厳格さ、教師の粗野さが支配する学校であった。「私の幼少時代の全てはプラーマン学校で台無しにされた。まるで刑務所のような感じ」とビスマルクは回顧している。

母は幼いビスマルクに教育を授け、その立身出世を願っても、それは自分の虚栄心の為であり、ビスマルクと兄のBernhard（ベルンハルト）をベルリンに訪ねることもなければ、休暇中であっても、成績が良くなければ、帰省を許さないという厳しい教育ママであった。この母との不幸な関係が、ビスマルクの孤独と人間的な冷たさの源になった可能性は否めない。しかしむしろ父からよりも母から受け継いだ素質の方が、後に彼の本性の特色を示すようになる。つまり、鋭い観察力や冷徹な合理性、精神不安定や名誉欲などである。

ビスマルクは過酷な6年間のプラーマン学校を経て、1827年から30年まではFriedrich Wilhelm Gymnasium（フリードリヒ・ヴィルヘルム・ギムナジウム）、30年から32年まではGraues Kloster（グラウエン修道院ギムナジウム）

に通った。これらの学校に移ると、ビスマルクはプラーマン学校の時のように辛い思いをすることはなくなり、活発な少年時代を過ごしている。しかし教師や級友の間で特に目立つ子供ではなかったようである。

学校の成績で注目されるのは、言葉に才能を示していることで、国語は「表現が抜群に優秀」であり、フランス語、英語の成績は特に優秀、ラテン語の読み書きも達者であった。その才能は、彼の外交文書や演説、『回顧録』などには比喩の巧みさ、表現のしなやかさや明快さ、力強さなどで名文がたくさんあり、19世紀の優れた散文に入るとのことである。彼の演説や談話にはラテン語やフランス語が盛んに用いられ、Shakespeare（シェークスピア）や Schiller（シラー）からの引用も数多い。

**大学時代** ビスマルクは1832年5月、Göttingen（ゲッティンゲン）大学に入学し、後にベルリン大学へ移った。そこで彼は、法律と政治学を専攻するが、これらの学問よりもむしろ、文学や歴史書に興味を示している。こうした体験と読書傾向は、法律をまともに身につけさせはしなかったが、自分の思想を力強く生々と表現する力量を培った。

ところが私生活を見ると驚かされるものがある。喧嘩と飲酒に明け暮れる蛮カラな生活を送った。そして足元にまで達するナイトガウンのような服を身に着け、巨大な犬を引き連れる、という異様な風采で挑発的に歩き回ったが、

このような反抗の楽しみ方に見て取れるものは、時代の進歩的な傾向ではなく、騒がれることで自己確認したがる貴族的な自惚れた自意識であった。当時、彼は自分のことを「プロイセンで最大のごろつきになるか、第一人者になるだろう」と述べている。

**官吏生活、田舎生活** 1835年3月、ビスマルクは大学を出ると、5月に最初の司法試験に合格し、司法官試補としてベルリンの裁判所に勤務した。しかし裁判所での勤務に彼は満足しなかった。そして司法職から行政職へ移ろうとして、国家学では「国政における節約について」、哲学では「宣誓の自然さと信頼性について」という題で、2つの国家試験の為の論文を書いている。これに続く口述試験の記録がビスマルクの優れた判断力、理解の早さ、豊かな表現力を確認している。

そして1836年7月に行政職の宣誓をした後、ビスマルクは次々と新しい女性との恋愛を重ねた。その度に、巨額の借金を作り、毎日豪華な食事などを楽しんでいる。他にも、自分に与えられた14日の休暇を遥かに超過して、数ヶ月を越える旅行をしている。このような職場放棄は公務員としての常識を遥かに越えた行為であるが、当時はビスマルクのユンカーとしての身分がこのような逸脱行為を可能にしたのであろう。

この後彼は、数ヶ月の Potsdam (ポツダム) 行政府での勤務と1年間の軍務を

済ませて田舎に戻り、ポメルンの地所の管理人になる。役所を辞めた本当の理由が、多額の借金であることを後に述べている。

しかしともかくも彼は田舎のユンカーの独立した生活に満足感を見だし、父の農場の財政難を建て直し、自分の借金もかなり返済する。確かに田舎の生活は、彼が愛する生活の一つではある。しかしやはり田舎の生活の退屈さと孤独が彼を苦しめることになる。ユンカーでありながら、周りのユンカーの知的水準を遥かに超えるビスマルクは、同じ身分の者達の中であって孤独であった。

**結婚** 田舎の生活は彼の内面に満足を与えず、孤独は深まるばかりであったが、やがて彼は敬虔主義者<sup>5</sup>である Adolf von Thadden Trieglaff (アードルフ・フォン・タッデン・トリーグラフ) を中心とするグループと接触するようになった。アードルフの娘 Marie (マリー) は、当時すでに婚約していた。マリーは敬虔主義者の生き方と信仰の中に留まりながらも、自然で人間的な官能の分かる女性であった。ビスマルクはそんなマリーとの会話を楽しみ、からかい、その女性としての魅力に心惹かれた。マリーも力と情熱に溢れ、婚約者とは比較にならないスケールの大きいビスマルクに魅了された。しかし厳格な敬虔主義者の生き方の中では、彼女は自分の感情をはっきりと自覚してはならなかった。

---

<sup>5</sup> 教会に頼らず、聖書と個人の宗教的体験を重んじるキリスト教徒の一派。

一方のビスマルクには、自分の感情を抑える強い意思があった。お互いの心の中に恋心を秘めながら、二人はその気持ちを抑えなければならなかった。浮気とか不倫という言葉が日常茶飯事の現代の状況とは、当時は違っていた。マリーもそうだが、この頃のビスマルクは、社会的に許されない二人の関係へ苛立ち、陰鬱かつ空虚さを見せている。この危機を打開する為に、マリーは自分の親友の Johanna von Puttkammer (ヨハナ・フォン・プトカマー) をビスマルクと結びつけようとする。しかし初めは、ビスマルクは特にヨハナに関心を示さなかった。

ヨハナは黒髪と黒い瞳の女性であった。しかし特別美しいわけでも、魅力あるわけでもなかった。ビスマルク相手に冗談も言った才色兼備のマリーに比べれば、ヨハナは素朴で生真面目、かつ凡庸な女性である。このヨハナにビスマルクは1846年12月、求婚の手紙を書いている。ビスマルクの才能からすれば、明らかに見劣りのするヨハナに、なぜ彼は求婚したのであろうか。

この時ビスマルクはすでに30歳を越えていた。孤独と寂寥感に囚われ、情熱のままに走る歳ではないという思いが強かった。そしてこのような状況から自分を救ってくれる伴侶を切実に求めていたのであろう。今は彼の為に良き家庭を作ってくれる、心からの慰めと安らぎを彼に与え、自分につき従ってくれる女性が必要であった。そして二人の結婚式は1847年7月に執り行われた。

ビスマルクは家庭では妻をこよなく愛し、子供に気を配る優しい父であった。因みにヨハナとビスマルクの間には3人の子供、1848年、Marie（マリー）、1849年、Herbert（ヘルベルト）、1852年、Wilhelm（ヴィルヘルム）が生まれている。このように彼の家庭生活からは、政治の世界とは別の一面が見えてくる。ビスマルクはヨハナという伴侶を得て、後顧の憂いなく、政治の世界に邁進することができたのである

### 3 ビスマルクの政治

**政治舞台へ登場** ビスマルクは、マリーの父であるアードルフを中心とする敬虔主義者のグループを通して保守派の政治家、特にマグデブルク高等控訴院長で枢密顧問官でもある Ludwig von Gerlach（ルートヴィヒ・フォン・ゲルラッハ）と、その兄の Leopold（レーオポルト）とコンタクトを持つようになっていた。レーオポルトは Friedrich Wilhelm（フリードリヒ・ヴィルヘルム4世）の側近でもあったから、ビスマルクは彼を通して王とコンタクトを持つ機会を得たのである。ビスマルクの最初の公的な活動は、1846年秋にシェーンハウゼンで地主達から選ばれた堤防監視の責任者としてである。彼はそこで、領主裁判権の維持や農民の土地で狩りをする権利など、ユンカーの特権の為に戦っている。

1840年10月に、プロイセン王としてフリードリヒ・ヴィルヘルム4世が即位している。自由主義者達は、1815年のドイツ連邦成立の際に、憲法制定の約束が果たされることを王に期待した。一方「王権神授説」を信奉する王は、憲法の要求を王政への攻撃と考えたが、8つの州から成る身分制の、第一回連合州プロイセン議会の召集を約束した。ビスマルクは1847年5月、初めて議員としてこの議会に登場した。

彼は王権と貴族の身分の為に、極めて挑発的に自由主義者達に挑んだ。彼にとって自由主義者達は退屈な人道主義のおしゃべり屋に過ぎず、彼らを嘲笑して憚らなかった。こうして32歳のビスマルクは、ゲルラッハなどの宮廷の強硬保守派である「側近党」の同志、王政を擁護する大胆かつ勇猛な戦士として、その名を轟かせるようになっていく。

**3月革命** 1848年は全ヨーロッパの革命の年であった。フランス、イタリア、ドイツの諸都市では市街戦を伴う激しい革命的動乱が起こった。

この頃、ヨーロッパにはイギリスを起点とした産業革命の波が押し寄せ、その中で没落してゆく手工業者達や悲惨な労働条件の下に苦しむ労働者達は、やり場のない憤懣を機械破壊などの暴発的行動に顕していた。その上1846年～48年にヨーロッパ各国を凶作が襲い、民衆の「飢餓暴動」が各地に発生していた。ドイツも例外ではなかった。しかもドイツではこのような産業革命の

波と凶作と共に、絶対主義的諸邦国の政治体制を覆すブルジョア革命の波が同時に押し寄せつつあった。

このような背景の下に自由主義的な反政府運動が高まり、憲法制定や国民参政権を強く要求するようになった。プロイセンの自由主義運動の先頭には、ブルジョアジー、とりわけ工業的先進地帯ライン州のブルジョアジーが立っていた。その代表的人物には Köln (ケルン) 商業会議所会頭 Camphausen (カンプハウゼン) や Aachen (アーヘン) 商業会議所会頭 Hansemann (ハンゼマン) がいた。

1848年2月、パリに共和制が樹立されてから1週間も経たないうちに、プロイセン領ライン州においても民衆の騒乱が起こった。直ちに王弟 Wilhelm (ヴィルヘルム) が軍総司令官の地位に就き、ベルリン守備隊は増強された。だが3月16日、オーストリアの首都ウィーンでメッテルニヒ体制が崩壊したという報がもたらされると、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は動揺した。そして3月17日夜、彼は憲法制定、検閲の廃止、ドイツ連邦の改革などを謳った勅語を發布する決意をした。また連合州議会を召集して、連邦制ドイツ統一議会の創立に向けて努めることを約束し、民衆も喝采してこれを歓迎した。だが、このような譲歩に対して王弟 Wilhelm (ヴィルヘルム) を初めとする軍隊は憤慨した。彼らは現存体制への反逆には断固として反撃すること

を望んでいたのだ。

翌18日、多数の民衆が勅語の発布を聞く為に王宮前に集まり、軍隊をベルリンから撤退させる請願を行った。ところが、軍隊はこの状態を革命の始まりと見て、国王の生命も危ういと判断し、民衆に対して発砲したことにより事態は一変した。民衆は市内の各所にバリケードを築き、市民と軍の間で市街戦が展開された。しかし軍の兵士達は市街戦の経験がなく、騎兵隊も破壊された石敷きの街路では思うように進撃できなかった。こうして軍隊の士気は衰え、市民達を攻撃するのを拒否する部隊も顕れた。国王は反乱を鎮圧できないことを悟った。そして「我が愛するベルリン市民に告ぐ」という布告を発し、バリケードの撤退を条件にしてベルリンから軍隊を撤退させた。

一方、この革命に対してビスマルクが取った行動はというと、一般大衆に妥協することなく、旧体制を維持しようとする彼は、革命の報せを聞くと、王を救出する為にシェーンハウゼンで農民を集め、猟銃で武装させている。地方には都市に反発し、王に忠実な気持ちを持つ農民が多数いたのである。しかしビスマルクは將軍から、じゃがいもや麦を送ってくれた方が良いなどと言われている。なぜなら、当時まだビスマルクは政治の舞台では端役でしかなく、せいぜいのところ、情報伝達者でしかなかったからである。

**自由主義内閣誕生**      3月29日、Rhein（ライン）州のブルジョア自由主義者

カンプハウゼンを首相に、ハンゼマンを蔵相にした自由主義内閣が成立し、ブルジョアジーが政権を担うこととなる。いわゆる「新時代」が始まり、プロイセンの民主化と自由と統一を求める動きは進展するよう見えた。

そして5月18日、フランクフルトで初めての国民議会が開催された。普通選挙ではあるが、自立した成人男子のみの選挙権ということもあって、議員の大多数は市民を指導する立場にある中産階級であった。国民議会では「国民の基本権」の問題から審議が始まり、ドイツ国憲法の制定と統一国家建設<sup>6</sup>について議論が行われ、後の Weimar (ヴァイマル) 憲法やドイツ基本法の基礎を作ったと言われている。しかし中央政府の権限には、財政的基盤や独自の軍事力、行政機関などが欠けていた。

ビスマルクはこの新しい状況に妥協しようとして、政府に協力を申し出ている。ゲルラッハ兄弟などの強硬保守派はこのビスマルクの変節に憤慨している。ビスマルクはヨーロッパに反革命が広がる1848年に、この変節について形

---

<sup>6</sup> フランクフルト国民議会ではドイツ統一の問題が審議されていた。その際、オーストリアの指導で、オーストリアのドイツ人居住地域を含めた全ドイツ国家を建設するのか、あるいはプロイセンを中心に、多民族国家のオーストリアを除くドイツ人の国家を建設するのが最大の争点であった。前者は大ドイツ主義、後者は小ドイツ主義と言われている。因みに、今まで統一国家として一つにまとまったことがないドイツにとって、神聖ローマ帝国が誕生した10世紀頃から、自国領の境界について国内で争われてきた。

式的にルートヴィヒに謝罪している。変化の早い動乱の政治状況の中で動揺はしているものの、彼はユンカーの物質的利害を守り、ブルジョアジーの国家支配を防ぐ為、王権や軍隊を強化するという考えに変わりはなかった。統一国家への関心はその頃はまだなく、彼の関心事はプロイセンだけであった。ともかくも今はブルジョアジーの参加する政府を傍観し、事態の推移を見守ろうとしていた。彼には3月革命の時の性急さがなくなり、慎重に行動するようになってきている。そして「側近党」との繋がりを再び密にしていく。

**反革命** 3月革命後の1850年代、やがてヨーロッパに反革命の動きが広まる。1848年10月、オーストリアの首都ウィーンにおいて革命の動きが再び活発化した。しかし、軍隊によって鎮圧された。

一方、プロイセンの自由主義内閣は、自由主義者が優勢な議会と宮廷や軍隊の間で不安定な統治を行っていた。そこにウィーンの反革命の勝利が伝わると、ベルリンでも11月、保守的な王族 Brandenburg (ブランデンブルク) 将軍が首相に任命された。さらに国王は議会在不穏な空気に包まれたベルリンから地方都市ブランデンブルクに移すことを強行した。もちろん議会は抵抗したが、すでにベルリン周辺には8万の軍隊が配備されていた。議会の左派議員達は市民軍に抵抗を呼びかけたが、正規軍の大軍を前にして抵抗することなく武装解除され、終いには議会をも閉鎖されてしまった。

軍内部では軍事独裁体制の樹立を望んでいたが、首相ブランデンブルクは、国王に一定の譲歩をさせることによって事態を收拾しようとした。そこで12月5日、欽定憲法草案が発布された。欽定とは人民によってではなく、君主によって命令し定められたという意味である。しかし、この憲法草案は当時、自由主義的な立憲君主制憲法と考えられていたベルギー憲法を参考にしたものであった。だから一方で国王に上下両院の無制限解散権や宣戦・講和締結権など強大な権限を与えると共に、他方でも男子普通選挙権を認めたり、憲法に対する軍隊の宣誓を規定していた。だが、これらの憲法草案の自由主義的要素に対しては、保守派や軍部の抵抗を呼び起こした。

しっくりいかなくなっていたゲルラッハ兄弟との関係を何とか立て直したビスマルクは、強硬保守派の為に、公にも秘密裏にも活動している。連合州議会議員やプロイセン下院議員として、ビスマルクは彼らのオルガナイザー、強力なアジテーターとなり、強硬保守派の新聞『新プロイセン新聞』の設立に参画したりしている。やがて彼は宮廷や「側近党」の中での活動が評価され、ルートヴィヒは彼を「側近党司令部の非常に活動的で知的な副官」と呼んでいる。

しかし厳格な敬虔主義者達はビスマルクに対して不信感を捨て切れず、王も彼を大臣にする決断ができないでいた。この頃のビスマルクには、「我々はプロイセン人であり、そうあり続ける」という言葉が示しているように、プロイセ

ンの権力とその強化が大事であり、ドイツ的な民族感情は二次的なものであった。ビスマルクに限らず、ドイツあるいはドイツ民族というものは、まだ抽象的な概念であって、精神的、文化的な意味で存在していたのである。

**反オーストリアへの道** さて3月革命後ビスマルクは、1851～59年の間、ドイツ連邦議会にプロイセン代表としてフランクフルトに派遣された。連邦議会といっても、これはドイツ諸邦国の政府代表の集まりで、オーストリアが議長国であった。こんなエピソードがある。この連邦議会では議長席にいるオーストリア代表だけが煙草を吸うことができるという慣習になっていた。ところが、ある時ビスマルクが平気で煙草を吸い始めたのであった。また、こんな事もあった。オーストリア代表が、議事録を自分に都合良いように訂正しようとした。これに抗議したのはビスマルクであった。そして決闘まで行われそうな騒ぎになった。

これらのエピソードの中には、ビスマルクがオーストリアに対してプロイセンの国家的威信を主張していこうとする態度が窺われる。当時、オーストリアといえば、昔日の勢威は無かったとはいえ、オーストリアの皇帝家＝ハプスブルク家はかつては神聖ローマ帝国の皇帝の地位を占め、ヨーロッパきっての名家であった。そしてプロイセンの保守派の中には、オーストリア・ロシア・プロイセンの東欧3君主国が相提携して、国内・国外の自由主義運動や革命運動

に対抗していくという考え、つまりかつての神聖同盟の理念がまだ脈々と生きていた。それに当時の外交の場というものは、まだ18世紀にみられたような貴族的な嗜みと節度を持って対処するのが常識であった。だからビスマルクが連邦議会で取った言動は、並み居るドイツ諸邦国代表を大変驚かし、連邦議会内で彼とプロイセンの孤立を招いたのである。ともあれ、ビスマルクにおけるプロイセン国家の強化・拡大の思想が、このようにして早くも反オーストリア的態度となって顕れ始めた。

他方、オーストリアの方も、ドイツ連邦において自己の威信を保とうとすれば、一番目障りなのはプロイセンの存在であった。このようなオーストリア・プロイセン関係に大きくひびを入れたのはCrimea（クリミア）戦争である。

**クリミア戦争** クリミア戦争といえば、ロシアとトルコの対立を中心に、トルコ側にイギリス・フランス・サルディニア（後のイタリア）、そして最終局面でオーストリアが味方した戦争である。オーストリアはもはや君主国同士とか、保守・反革命とかという理念よりも、自国の利害関係を優先した為、かつての神聖同盟の仲間であったロシアに敵対し、イギリス・フランスのような議会主義国や共和国の側に附いた。これに対してプロイセンは親ロシア的な超保守派と、親英的な開明保守派や自由主義派との間にあって動揺を続けた。結局プロイセンはロシアに軍需品の供給だけを行って中立を貫いた。

この時ビスマルクは、連邦議会でオーストリアが親西欧 = 反露的立場を押し付けようとした際、断固として反対した。そして他のドイツ諸邦をも巻き込んでオーストリアの見解を阻止した。プロイセン外交は、オーストリアの下風に立つことから脱却し始めたのである。このような結果をもたらしたビスマルクの見解の背後には次の2つの独自の発想があった。

1つは“ Realpolitik ”つまりは神聖同盟的理念とか自由主義とかという、理念やイデオロギーから外交・政治を考えるのではなく、プロイセン国家の利害を中心に発想したことである。もう1つは起こりうるであろう諸状況に多様な対応ができるようにしておくことであった。この点は、後年ビスマルクが国内政治においても、対立する複数の政治勢力の中で、特定の勢力と永続的な固定した提携関係を結ぶことに、慎重に対処していった態度にも連なるものである。

**憲法紛争** 1862年9月22日、ビスマルクはプロイセン首相に任命された。ビスマルク47歳の時である。しかし彼が練達の現実主義的政治家としての資質に磨きをかけて登場してきたことは、知る人ぞ知る状態で、むしろ彼の前歴からは、極右派とされていたので、彼の首相就任を喜んだのは保守派であって、穏健な自由主義者達は深い不信の念を持って迎えられたのであった。しかも不評のビスマルク内閣は短命に終わるのであるというのが、大方の観測であった。だから下院は、このような内閣に軍制改革の為の人と金とを供給

できないとして、ビスマルク首相就任の翌日9月23日、軍制改革の為の予算支出を、わずかの賛成のみで圧倒的多数をもって否決した。その上、下院の自由主義者達の憤慨をいやがうえにも高めたのは彼の有名な「鉄血演説」であった。9月30日、ビスマルクは下院の委員会で語った。

「ドイツがプロイセンに注目しているのは、その自由主義ではなくして力である。……現下の大問題は、言語や多数決　これが1848～49年の大錯誤であった。　　によってではなく、鉄と血によってのみ解決される。」

この演説の真意は、プロイセンにとっては国内紛争よりも対外的問題が切迫していることを強調したのであったが、「鉄血宰相」という異名をクローズ・アップしてしまった。

だがビスマルクは予算無しでも軍備拡張を行う意思を表明した。プロイセン憲法では予算の成立条件としては、国王と両院との一致を必要としていたが、一致がみられなかった時、どうするのかということについて規定が無かった。ビスマルクはこのような憲法上の不備について、国家活動は停止しえない以上、政府は予算無しでも統治の責任を果たさなければならないと主張し、以後4年間にわたり予算無しの統治を敢行した。これに対して下院は、憲法99条「国家の支出入は予算化され、予算は毎年法律をもって確定する」　違反として、政府の憲法違反を非難した。ここに軍制改革問題は、憲法をどう捉えるかとい

う、「憲法紛争」へと発展した。

こうして問題は、下院の予算審議権を尊重することによって、軍事予算を下院の統制の下に置くことができるか、それとも軍事予算は下院の態度いかんにかかわらず、国王・政府の意思のみで自由に成し得るのか、もっと端的に言えば、軍隊を下院と国王・政府のいずれが支配するのか、こういう重大な問題へと発展したのである。

下院と自由主義派が軍隊とその強化に反対しているのは、軍隊が彼らの圧迫の手段すなわち国内的手段として用いられるという危惧があったからである。このことをビスマルクは知っていた。だから、もし軍隊が対外的問題に発動されるならば、この危惧は和らげられる。しかしその場合に、ビスマルクにとって「注意事項」があった。それというのは、積極的対外政策が、決してオーストリアとの敵対関係を作り出さないようにすることであった。反オーストリア政策は、国王など超保守派の激しい反撃と反対を呼び起こすからである。彼らは依然として神聖同盟的理念から解放されていなかったのだ。しかし、さりとて対外政策が反自由主義的なものでは国内紛争の解決に役立つものとはならない。これらの諸条件を満たしつつ、積極的な対外政策を推進すること、これが紛争収拾の条件としてビスマルクに課せられていたのである。

こうして袋小路に入った政府と下院の対立を打開するきっかけは、「外」から

やってきた。対デンマーク戦争である。

**デンマーク戦争** この戦争はドイツ北方の Schleswig-Holstein (シュレスヴィヒ・ホルシュタイン) 両公国をめぐる問題を原因として起こった。この両公国はドイツ人とデンマーク人とが共に住んでいた為に、ドイツとデンマークのいずれに帰属するかをめぐり紛争が絶えなかった。

1863年3月、デンマークの Friedrich . (フリードリヒ9世) は新しい憲法を告示して、一方的にシュレスヴィヒをホルシュタインから切り離し、デンマークに併合しようとした。これは先に取り決められていたロンドン議定書に違反していた。これに対してビスマルクは、「プロイセンはデンマークにロンドン議定書を遵守すること以外は要求しない」とプロイセンの行動を大義名分化し、イギリス、フランス、ロシアなどの大国がプロイセンの行動に反対できないようにした。またロンドン議定書にはオーストリアも加わっていたので、議定書の決定を守るとし、オーストリアとの共同作戦を起こすことを可能にした。

そして1864年1月には、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン、デンマーク領の Jutland (ユトランド) も制圧した。ビスマルクは1865年8月の Gastein (ガスタイン) 協定で、ひとまずシュレスヴィヒはプロイセン、ホルシュタインはオーストリアの行政下に置くことにした。

この戦勝によってプロイセン国内の政治気流に変化が生じ、自由主義者達の

反政府闘争の矛先は鈍り始めた。つまりビスマルクは対外的成功によって国内の政治的緊張を緩和させることにも成功したのである。

**オーストリア戦争**　ガスタイン協定による両公国の共同管理は、一時的な間に合わせの策であり、プロイセンとオーストリアの対立はその後ますます激化し、1866年に入ると両国とも戦争を不可避と考え、戦争の為の外交工作に走った。オーストリアはフランスと秘密条約を結び、オーストリアが勝利を収めた時は、プロイセンにライン川左岸の領土を割譲させて、フランス寄りの新しい邦国の創立を約束した。

一方ビスマルクも、外交では天才的な手腕を発揮した。彼もフランスの Napoleon III (ナポレオン3世) にライン川左岸の提供を匂わせて中立を約束させ、さらにイタリアと同盟を結んで、オーストリアの背後を脅かそうとした。

しかし問題は国内にもあった。まず王自身がオーストリアとの戦争に躊躇いを感じていたし、「憲法紛争」を巡って自由派はビスマルクに激しく対立していた。内外の敵を抑え、戦いに駆り立てていく為に、ありとあらゆる策謀を練った。不眠不休が続く中で、激しい胃痙攣を起こし、「神経の破産」寸前だった。

そのような状況の中、1866年6月、両国間に戦端が開かれた。当時は、ナポレオン3世を初めとして大方は、オーストリアの勝利を予測していた。ビスマルクは十分に熟慮もするが、ここ一番というところでは、ギャンブラーで

もあった。この戦いに全てを、自分の命をも賭けていた。

そしてこのプロイセン軍の指揮を取ったのは Helmuth von Moltke (ヘルムート・フォン・モルトケ) 参謀総長であった。モルトケは対デンマーク戦争で、その卓越した軍事能力を認められていた。彼はナポレオン1世の用兵術などを十分に研究していた。彼の下で参謀総長と各軍団司令官との直結した命令系統が確立され、近代的な戦術のとれる体制が確立されていた。彼は産業革命の成果である鉄道や電信を効果的に活用し、大規模軍団を迅速に分散・進撃させ、戦略の拠点で集中・攻撃させた。また兵員の移動だけでなく、軍需物資の輸送においてもプロイセンはオーストリアに優っていた。火器では砲兵隊でオーストリアに劣ったが、その他ではプロイセンの方が優秀であった。そして何よりも、プロイセン軍の士気の方がオーストリア軍よりも高かった。

そして1866年7月3日、戦争は予想を裏切って、わずか7週間をもってプロイセンの勝利に終わった。因みにオーストリア側の戦死者が1万人を越えたのに対し、プロイセン軍は約2千人だった。

**北ドイツ連邦の成立** 戦後、ドイツ連邦は解体され、Main (マイン) 川以北にプロイセン王を首長とする北ドイツ連邦が誕生した。そしてオーストリアはドイツから除外され、ドイツに対して外国の地位に追いやられた。

北ドイツ連邦は3つの自由市を含む22の邦国で構成された。旧来のドイツ

連邦が「国家の連盟」であったのに対し、北ドイツ連邦が連邦国家の性格を持っていた。北ドイツ連邦の憲法は、プロイセンの覇権原理に合わせられていただけでなく、ビスマルク個人の権力にも合わせられていた。北ドイツ連邦の仕組みは、1871年に成立するドイツ帝国と全く同じものであった。

連邦国家を体言する組織としては、連邦国会があった。この国会は普通・直接選挙で選ばれ、予算審議権を認められていたが、軍事予算は臨時措置として1871年まで固定され、毎年の予算審議から外されていた。プロイセン国王は連邦主席として、連邦宰相を通して執行権を行使する他、連邦を代表し、宣戦・講和・条約締結の権限を持った。またプロイセン国王は、連邦の陸海軍の最高指令権を所有した。そして連邦宰相は連邦首席の国事行為に「責任を担う」ただ一人の連邦政府の大臣として、国会で演説、答弁に立つ義務を負った。しかし国会の方は、連邦宰相に不信任案を出して、政府を倒すことはできなかった。こうしてビスマルクは独裁的な権力を手にした。

そして国内状況はというと、ビスマルクの成功とその政策は、貴族や市民階級だけでなく、労働者階級をも魅了した。その為、ビスマルクが提出した議会の予算承認無しで行われてきた国家統治についての「事後承認法案」も採択され、自由主義派との確執であった「憲法紛争」は終了した。

ビスマルクはドイツ内外の無数に山積みする難問に、同時に対処しなければ

ならなかった。領土的野心を持ち、ドイツ統一を妨げようとするフランスに対して、慎重に行動する必要があったし、反プロイセン的な感情を考慮に入れながら、南ドイツ諸邦国とも交渉しなければならなかった。彼は戦勝を利用して圧力をかけながら、これらの邦国と講和条約に加えて秘密攻守同盟を結んだ。これによって戦争が起きた時は、各邦国の軍隊はプロイセン王の指揮下に入ることとなった。

**フランス戦争**　ドイツ統一を完成する為には、フランスを叩くことが必要であった。それというのもナポレオン3世治下のフランスは、隣国ドイツに強力な統一国家が生まれることを望んでいなかったばかりでなく、事々にドイツが分裂状態を続けるような画策をやってきたからである。ビスマルクは、このフランスと戦端を開くことによって、ドイツ全土をナショナリズムの中に巻き込み、南ドイツ諸邦国を含めて、統一ドイツの枠組みに組み込むことを考えたのである。そこに折り良くスペイン継承問題が起きたのである。

1868年スペイン女王 Isabella . (イサベル2世) がクーデターで追放され、新国王を探していた。そしてプロイセン王家 = Hohenzollern (ホーエンツォレルン) 家支流の Sigmaringen (ジグマリンゲン) 家の王子レーオポルトに白羽の矢が立った。スペインからの申し入れに候補者の父もヴィルヘルム1世も乗り気ではなかったが、ビスマルクはこれを積極的に、しかも秘密裏に推進した。し

かしスペイン政府はこれを早まって公表した為、フランスは自国の安全を脅かす陰謀と捉えた。

反プロイセン感情の沸き返るフランス世論を背に受け、ベルリン駐在大使の Benedetti (ベネデッティ) は Bad Ems (エムス温泉) に逗留していたヴィルヘルム 1 世にレーオポルトの立候補断念を迫った。王はレーオポルトの即位辞退を承諾し、レーオポルト自身も辞退した。ここまではフランスは外交に勝っていた。フランスは勢いづき、これまでの外交成果に満足せず、今後二度とレーオポルトが即位しない旨の確約を王から取ろうとした。だが、さすがにこの侮辱的な要求は、誇り高いヴィルヘルム王に受け入れられるはずもなく王はきっぱりと拒絶した。

ビスマルクのもとに王からの電報が届いた。ここでビスマルクは王の側を離れて、王に独自の行動をさせてしまった最初の失敗を一気に挽回した。王は電報でビスマルクに、ベネデッティの新しい要求とそれを拒絶したことを伝えると共に、この扱いをビスマルクに一任した。そこでビスマルクは電報に手を加えた。ベネデッティの非礼に王は腹を立て、今後フランスとは交渉しないという印象を国民に与えるように変えて、新聞に公表した。これには、反プロイセン感情が今だに強い南ドイツ諸邦国を抑える為には、フランスが無理難題をドイツ側に押し付けようとしているという状況を作り出して、プロイセンに対す

る敵意を逸らそうという意図が含まれていた。そして案の定ドイツの世論は沸き立った。かたやフランスでも国民は激昂し、7月14日に宣戦布告の閣議決定がなされた。これが有名な“Bad Ems Depesche”「エムス電報事件」である。

これまでにビスマルクは諸外国に様々な手を打っていた。ロシア・オーストリア・イギリスとも自国の利害関係を考慮し、プロイセンに同調、あるいは中立の立場を取った。またフランス大使のベネデッティは直筆の条約草案をビスマルクの手元に残すという失態を演じていた。その草案は、フランスがベルギーとルクセンブルクを獲得するのにプロイセンが協力するなら、プロイセンによる南北ドイツの統一を認めるというものだった。ビスマルクはこの草案を公表して、反フランス網を形成するのに利用した。南ドイツ諸邦国も今や、プロイセン以上にフランスの領土への野心とドイツ統一を妨げる干渉に対抗しようとする機運、民族としての誇りが燃え上がった。

対仏戦を想定して、ドイツ側軍部はモルトケ参謀総長の下、入念に準備を重ねていた。ドイツ軍情報部はフランス軍の動向を的確に把握し、参謀本部からの指揮系統が一貫していたのに対し、フランス側は情報機関を持っていなかったし、組織系統も混乱していた。さらに兵士の士気に大きな差があった。ドイツ軍の兵士には民族統一を目指して戦おうとする犠牲的な精神があったのに対し、フランスではブルジョアジーが、自分の子弟の入隊を嫌って、金を払って

身代わりの者を兵役に就かせていたからである。

8月フランスの Elsass (アルザス) と Lorraine (ロレーヌ) 地方に進入したドイツ軍は連戦連勝し、フランス軍主力のロレーヌ軍を Metz (メッス) の要塞に包囲した。そしてメッス救援に向かおうとしたナポレオン3世を追い込み、9月2日、全軍と共に降伏させた。しかしフランスは戦争をやめなかった。70年9月4日、パリに民衆暴動が起こり、帝政が廃止されて、臨時政府が成立した。これに対して、ドイツ軍はパリへ攻め込み、完全包囲した。ここに戦争の性格は一変した。戦争はドイツ統一を妨げるナポレオン3世を撃つというかぎりでは、ドイツ側にとって防衛戦争であったが、そのナポレオン3世が降伏した今なお戦争を継続することは、ドイツ軍によるフランスの征服戦争へと変わった。

**ドイツ帝国の創立** 1871年1月18日、未だパリ砲撃が行われる中 Versailles (ヴェルサイユ) 宮殿・鏡の間においてプロイセン王ヴィルヘルム1世のドイツ皇帝としての戴冠式が挙行された。だが、ここに行きつくまでには様々な問題があった。まず問題となったのは統一国家を創るにあたっての南ドイツ諸邦国の君主達、特に南独の雄邦 Bayern (バイエルン) 王の抵抗であった。バイエルンといえばプロイセンに次ぐ広さの領土、伝統と名家の誇りある王家、これらに恵まれたバイエルン王国が、簡単にプロイセンの下風に立つことは困

難であった。バイエルンは軍隊について独自の管理や権限などを要求した。これに対し、ビスマルクは譲歩した。バイエルンにはいくつかの特権を認め、さらには Ludwig（ルートヴィヒ2世）の夢の希望であった築城の資金を密かに提供することを約し、ようやくバイエルンを屈伏させ新帝国の一員に加えることに成功した。ところが他方でプロイセン国王自身が問題となった。彼は先祖代々に慣れ親んできたプロイセン国王の称号を捨てきれず、ドイツ皇帝という称号を持つことに同意しなかった。ビスマルクは先に述べたようなバイエルンへの譲歩と引き換えに、バイエルン王にヴィルヘルム1世宛ての皇帝推戴の親書を書かせた。そのうえ北ドイツ連邦議会も動かして、ドイツ諸邦国君主によるヴィルヘルム1世皇帝推戴を承諾するように代表団をヴィルヘルム1世の下に派遣させた。彼は泣き崩れながら皇帝になることをやっと承諾した。

こうしてドイツ国民の名においてではなく、諸邦国君主と諸都市の名においてプロイセン国王をドイツ皇帝の地位に就かせたのである。

**帝国成立後のビスマルク**　ビスマルクは対デンマーク、対オーストリア、対フランス戦争で輝かしい勝利を収め、プロイセン（ドイツ）を一躍、ヨーロッパの大国に押し戻した。しかし対仏戦争後の彼の対外政策は、これまでの武力による政策と根本的に異なっていた。彼の基本方針は、今までに獲得したものを維持することに重点が置かれた。ドイツの国境を戦争でさらに拡大しようと

いう意図は、彼にはなかった。

1888年3月9日、皇帝ヴィルヘルム1世は91歳の高齢で没した。ビスマルクは、ドイツ帝国議会で老皇帝の死去を報告した。彼は取り乱しながら語った。どの議員にも聞こえるほどの咽び泣きで、その報告は何度も途切れた。老皇帝とは愛憎半ばする実に様々な確執があったが、皇帝の死去とともに、ビスマルクは自分の権力にとって、最も重要な支えを失ったのだった。その後、ヴィルヘルム1世の孫、Wilhelm II.(ヴィルヘルム2世)が皇帝に即位すると、お互いの意見の対立から、1890年3月18日、ビスマルクは罷免され長かった政治の世界から引退していった。

政界引退から4年後、1894年11月27日、ビスマルクの妻ヨハナが亡くなった。ビスマルクは亡き妻の傍らで、子供のように泣き崩れた。

ビスマルクも、いよいよその晩年を迎えて、体力の衰えは目立ち車椅子から離れられなくなっていた。彼は、ヨハナが亡くなれば自分もこの世に留まりたくないとは何度も訪問者に述べていた。今、病気以上に彼の力を奪うのは孤独であり、諦念であった。1898年7月30日の夜11時頃、ビスマルクは息を引き取った。臨終の言葉は、「私のヨハナにまた会えますように」であった。そしてビスマルク自身が自分の墓碑銘に記入するように指定した言葉は、「我が皇帝ヴィルヘルム1世の忠実なドイツの召使」であった。

## O t t o   v o n   B i s m a r c k

Otto von Bismarck wurde am 1 April 1815 in Schönhausen als Kind Adelliger geboren. Er ist der Vater des Deutschen Kaiserreiches. Von 1862 bis 1873 war er Premierminister von Preussen und von 1871 bis 1890 der erste Kanzler von Deutschland. Er wird der “ eiserne Kanzler ” genannt. Er ist am 30 Juli 1898 gestorben.

Er studierte Rechtswissenschaft an den Universitäten Göttingen und Berlin. Er machte sich 1859 einen Namen, als er nach Russland ging um, als Botschafter zu arbeiten. Im März 1862 kam er zurück, um Botschafter in Frankreich zu werden. Nur sechs Monate später kam er nach Deutschland zurück, um Premierminister zu werden. Er hoffte ganz Deutschland zusammen zu bringen. Und in kurzer Zeit hatte er diese Arbeit vollendet. Weil er Deutschland so stark machte, konnte Deutschland drei Kriege gewinnen; erst 1863 gegen Dänemark, dann 1866 gegen Österreich, und 1870 auch gegen Frankreich.

Viele andere kleine deutsche Länder hatten an diesen Kriegen

teilgenommen, und wollten sich mit Deutschland verbinden. Württemberg, Baden, Hessen und andere hatten sich unter Bismarck vereinigt, und sie machten ein großes Bündnis. 1871 entstand aus diesem Bündnis das erste deutsche Reich. Der erste Kaiser war Wilhelm I. Kaiser Wilhelm machte Bismarck zum ersten Kanzler. Es war ein Beruf mit viel Prestige, weil er nur für den Kaiser, aber nicht für das Parlament arbeitete. Das Parlament machte die Gesetze, aber Bismarck sagte, welche Gesetze das Parlament zu machen hatte. Er wählte auch die Minister für Deutschland.

Seine wichtigste Leistung ist, daß er das erste System einer Sozialversicherung schuf. Nach drei Kriegen hatte Deutschland für viele Jahre Frieden.

1890 entließ Wilhelm I. Bismarck aus der Politik. In seinen letzten Jahren schrieb er seine Memoiren.

Bismarck war groß, hatte einen blonden Bart und einen stämmigern Körper. Aber seine Stimme war schrill. Seine Rede war nicht fließend, als ob er die Sätze suchte. Seine Sätze waren individuell, konkret und fingen die Wichtigkeit eines Problems ein.

## 参考文献

- \* 『ドイツ統一戦争 ビスマルクとモルトケ』望田幸男著  
(教育者歴史新書 西洋史A2) 教育者 1979
  
- \* 『ビスマルク - 生粋のプロイセン人 帝国創建の父』  
エルンスト=エンゲルベルク著 野村美紀子訳 海鳴社 1996
  
- \* 『ビスマルク』加納邦光著 清水書院 2001
  
- \* 『世界史B 用語集』人見春雄・臺靖・鈴木敏彦・増田正広著  
山川出版社 1995

### 辞書

- \* 『アクセス独和事典』在間進編 三修社 1999
  
- \* 『国語事典「第八版」』松村明・山口明穂・和田利政著 旺文社 1992